

令和4年度 前期常設展 いわき七浜の海水浴場

はじめに

いわき七浜と呼ばれる、約60kmに及ぶ海岸線を擁する本市では、海水浴は夏のレジャーとして市民に親しまれ、東日本大震災以前は、多くの海水浴場が開設されていました。

今回の常設展では、主に勿来海水浴場、小名浜海水浴場、薄磯海水浴場、四倉海水浴場、久之浜・波立海水浴場について取り上げ、本市の海水浴場の沿革や、海水浴場に関する出来事などについて、当時の絵はがきや写真、新聞記事とともに紹介します。

いわき市立いわき総合図書館

いわき市内の主な海水浴場



【いわき七浜とは】

「いわき(磐城)七浜」は現在では、勿来・小名浜・永崎・豊間・薄磯・四倉・久之浜の7か所を指すことが多いようですが、かつては、現在の富岡町から北茨城市の辺りまでを含む浜の総称で、「七浜」とは、「たくさんの浜」という意味でした。それが、時代の経過とともに7か所が特定されていき、現在のようになっています。

海水浴のはじまり～昭和10年代

和暦	西暦	月	日	事項
明治18	1885	8		神奈川県中郡大磯町に本格的な海水浴場開設。
明治30	1897	2		「日本鐵道磐城線(現・常磐線)」が平まで開通。
明治30	1897	8		「日本鐵道磐城線(現・常磐線)」が久之浜まで開通。
明治36	1903	5		[四倉]「四倉海水浴(友)倶楽部」設立。
明治36	1903	夏		[四倉] いわき地方初の海水浴場・四倉海水浴場開設。休憩所・海水浴場施設が設置された。
大正8	1919	夏		[久之浜] 久之浜町の旅館等から寄付を募り、青年団が脱衣場等の施設を設置。
大正9	1920	7		[松川磯(現勿来)] 消防組や青年会が無料脱衣場を設置。
大正末				乗合バス登場。
大正12	1923	夏		[小名浜] 磐城海岸軌道は、夏季限定で海水浴用の乗合バスを運行。
昭和3	1928	夏		[四倉] 平芸妓芸妓屋組合と平料理屋組合が、自動車十数台を貸し切り海水浴を行う。
昭和初				[四倉] 四倉漁港の拡張の影響で、南方の砂浜に移動。

和暦	西暦	月	日	事項
昭和4 頃	1929 頃			[剣ヶ浜] 臨時的に海水浴場を開設。脱衣所には、閉山となった三井鑛山藤原鑛の坑夫長屋を転用。
昭和10 年代				[永崎] 海水浴場開設。
昭和13	1938	5		[小名浜] 小名浜港の3千トン岸壁が完成し、岸壁の西側が海水浴場となった。
昭和14	1939	7		[剣ヶ浜] 海水浴場を開設。
昭和16	1941	11		[小名浜] 小名浜臨海鉄道開通。小名浜駅は、海水浴場の目の前にあった。
昭和17	1942			水泳が体力章検定の随意種目に加えられたことから、学校の教練として海水浴場が使われた。
昭和19	1944			戦時色が強くなり、海水浴が禁止となる。

海外で行われていた海水浴の情報が日本に伝わったのは、江戸時代後期頃で、オランダの医学書や、シーボルトをはじめとする来日した外国人によるものでした。この海水浴は、病氣治療を目的とするもので、「潮(汐)湯治」や「海水浴(ウミミズユアミ)」と言われていました。

その後、オランダ海軍軍医・ポンペの教えを受けた医師・松本順(良順)の尽力で、明治18(1885)年、神奈川県中郡大磯町に本格的な海水浴場が開設されました。次第にレジャー的要素を含んだ海水浴が一般に認知されるようになり、各地に海水浴場が開設されるようになりました。

いわき地域では、平町(現いわき市平)の開業医・酒井国三郎が、健康増進策として潮湯治が有効であるとし、海水浴場の開設を働き掛けました。特に四倉町の海岸は、明治30(1897)年に日本鉄道磐城線(現 JR 常磐線)が久之浜駅まで開通しており、交通の便が良かったことと、市街に近いことなどから、平町や四倉町の有志や青年会などによって「四倉海水浴(友)倶楽部」が設立され、明治36(1903)年夏、いわき地方初の海水浴場・四倉海水浴場が旅館・海気館(四倉町字六丁目)前に開設されました。

四倉海水浴場と同様に、明治時代からにぎわいを見せていたのは、現在の小名浜港に当たる場所に開設されていた小名浜海水浴場でした。常磐線の泉駅や湯本駅と軽便鉄道(簡易な造りの鉄道)で繋がっており交通の便が良かったことと、市街地に隣接していたことが要因となっていました。

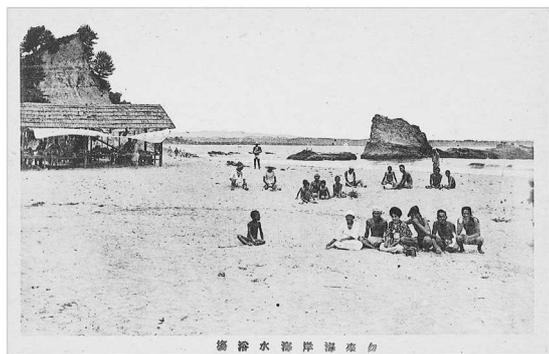
それに対して、松川磯(現勿来)海水浴場は、勿来駅から距離があったことなどから、知名度はあまり高くありませんでした。しかし、大正末期から乗合バスが発達したことで、交通の不便さが解消されていきました。



【絵はがき】「磐城四倉」海水浴場 (大正時代)



【絵はがき】「小名浜風景」海水浴場 (大正時代)



【絵はがき】勿来海岸海水浴場 (大正時代)

酒井国三郎【慶応4(1868)年—昭和13(1938)年】

笠間藩主牧野家の家臣として、中神谷陣屋(平中神谷)に勤めた酒井家に生まれました。

明治維新後、医療の道に進み、平町字南町(現平南町)等に開業しました。また、磐城中学校(現県立磐城高等学校)の校医を務め、体力づくりとして海水浴(潮湯治)を推進し、上水道の衛生面の必要性を説く等、医療の近代化を訴えました。

一方で、故郷草野村(平下神谷)の海岸域を、兵庫県の舞子浜海岸から取って「新舞子」と名付ける等、文化面でも大きな足跡を残しています。

この頃には、現在の久之浜港の近辺に 2 か所の海水浴場が開設されていました。市街地に近く、大久川の右岸に開設された「久之浜第一海水浴場」と、殿上岬の内側に開設された「久之浜第二海水浴場」です。この久之浜第二海水浴場は、当時、大久川河口域を利用していた久之浜港の、第二海水浴場周辺への移転築港の影響で海水浴場として適さなくなり、久之浜第一海水浴場が久之浜のメインの海水浴場になりました。

同様に四倉海水浴場や小名浜海水浴場も築港の影響を受けています。四倉海水浴場は、昭和初期の四倉港の拡張によって南方に移動し、小名浜海水浴場は、昭和 13(1938)年に 3 千トン岸壁(現 1 号ふ頭の一部)が完成したことで、岸壁の西側に設置されるようになりました。

この間、各海水浴場では、脱衣所や休憩所などの施設が整備され、海水浴のための臨時列車や臨時バスが運行されるなど、海水浴は、夏季のレジャーとして多くの人を呼び込みました。しかし、戦時色が強くなるにつれて、レジャーとしての海水浴は影を潜め、昭和 19(1944)年には禁止されてしまいました。



【絵はがき】「磐城久之浜名勝」
久之浜第一海水浴場 (昭和時代初期)

📶 『常磐毎日新聞』大正 15 年 8 月 10 日 2 面
「炎天下を長駆する四倉行の自転車隊」

大正 15(1926)年 8 月に「自転車遠乗会」の参加者は、当時、平揚土にあった「平町立商業学校(現県立平商業高等学校)」を出発し、四倉海岸で海水浴や福引を楽しみました。

この「自転車遠乗会」は、大正 14(1925)年 8 月に『常磐毎日新聞』の 500 号記念として初めて行われたもので、参加者に好評だったことから、翌年も開催することになりました。

📶 『常磐毎日新聞』大正 15 年 8 月 6 日 2 面
「家庭欄・海水浴と塩分」

海水浴で体に付着した海水の塩分の効果について説かれています。

この頃の記事には、海水浴の効能について解説されたものが散見され、「潮湯治」と言われ、病氣治療を目的とした海水浴の側面が垣間見えます。

📶 長塚 節「青草集」

汐干潟 磯のいくりに釣る人は
波打ち来れば 足揚て避けつゝ

長塚節【明治 12(1879)年—大正 4(1915)年】

歌人、小説家。茨城県常総市に生まれ、正岡子規に師事しました。明治 36(1903)年「馬酔木」を創刊し、同じ頃、小説を書き始めました。

明治 39(1906)年に 3 週間の病気静養のために茨城県北茨城市平潟町に滞在し、歌集「青草集」と短編小説「隣室の客」の素材を得ています。

この歌は、勿来海水浴場の二つ岩で釣りをする人々を詠んだものです。この歌の、波が寄せてきたところを、足を上げて避ける釣り人の様子は、「隣室の客」にも描かれました。

📶 田山 花袋『温泉めぐり』
「常磐線沿線の海水浴」

磐城に入ると、勿来関趾がそこから遠くない。その海岸には、風光画が如くなる松川磯の海水浴場がある。松が非常に美しい。

平町以北では、久の濱海水浴が好い。海も見事である。附近に波立の薬師があって、奇岩怪石が多い。

田山花袋【明治 4(1871)年—昭和 5(1930)年】

小説家、詩人。本名は田山録弥、群馬県館林市に生まれました。

上京し、明治 24(1891)年に尾崎紅葉を訪れ小説家を志します。明治 40(1907)年に『蒲団』を発表し、自然主義文学の方向性を確立しました。

一方で、自ら全国各地を巡り、多くの紀行文を発表しました。大正 7(1918)年に出版された『温泉めぐり』は、そういった中の 1 冊です。日本全国の温泉地や名所等について書かれ、いわき地域の海水浴場が 2 か所、紹介されています。

「久の濱海水浴(場)」とありますが、付近に波立薬師があると書かれていることから、波立のことではないかと推測されます。

戦後～昭和 40 年代

和暦	西暦	月	日	事 項
昭和 20	1945	8		第二次世界大戦が終結。
昭和 26	1951			[小名浜] 海水浴場に隣接する 1 号埠頭の岸壁西側に、飛込台が設置された。
昭和 20 年代半ば				[永崎] 地元の有志が 1 軒の脱衣所を設置して、海水浴場として注目されるようになった。
昭和 20～ 30 年代				須賀川や郡山から海水浴客臨時列車や平—永崎の夏季直通列車「くろしお」が運行された。
昭和 31	1956	10	21	[松川磯(現勿来)] 海水浴場南域に「勿来水族館」開館。
昭和 35	1960	5		[小名浜] 小名浜港 1 号埠頭の石炭埠頭、整備開始。
昭和 35	1960	夏前		[松川磯(現勿来)] 松川磯海水浴場から勿来海水浴場へ改称。
昭和 35	1960			[小名浜] 小名浜港整備に伴い、海水浴場はこの年を最後に廃止。
昭和 35 頃	1960 頃			[照島] 小名浜海水浴場が廃止されたことに伴い、照島海水浴場が開設されるようになる。
昭和 35 頃	1960 頃			[永崎] 小名浜海水浴場が廃止されたことに伴い、磐城市観光協会は永崎海水浴場の PR を積極的に行うようになる。
昭和 36	1961			[四倉] 海岸線を通る国道 6 号(現国道 395 号を含む)が久之浜町まで整備され、四倉海水浴場は、南方の海岸域へ移動。
昭和 41	1966			[薄磯] 海岸付近に駐車場を増設。
昭和 41	1966	7		[勿来] 海水浴場に高さ 8m 余の監視塔を設置。
昭和 41	1966	10	1	14 市町村が合併し、いわき市誕生。
昭和 42	1967	7		[勿来] 関山地内に自動車 600 台を収容できる駐車場を設置。
昭和 45	1970	7		[勿来] 潮流の激しい二つ島周辺を除き、海水浴区域を 1km に拡張。
昭和 45	1970	夏		[釜ノ前] 防波堤の整備が進んで安全性が向上したことから、海水浴場を試験的に開設。
昭和 45	1970			[四倉] 四倉港の拡張によって、海水浴場は南方に移動。
昭和 46	1971			[釜ノ前] 海水浴場を正式に開設。(昭和 50 年頃、廃止)
昭和 46	1971			[勿来] 第二監視塔を設置。

レジャーとしての海水浴は、昭和 20 年代半ば頃から復活し、その後の高度経済成長による日本の所得水準の上昇に伴って、人気を集めていきます。昭和 30 年代から 50 年代にかけては、夏季の観光客数が 100 万人に達することも珍しくなくなりました。

その頃から、海水浴入込客数を伸ばしてきたのは、薄磯海水浴場でした。車社会の到来によって増える観光客を受け入れるため、道路整備や駐車場の増設、国民宿舎などの施設の整備が進められていきました。

その他の地域でも道路整備が行なわれていきます。大きなものとして、国道 6 号の整備工事があります。四倉・久之浜地域では、海岸域を通るルート(現国道 6 号・国道 395 号)が選ばれたことで、バスや自動車の利便性が高まり、波立や蟹洗をはじめとして、多くの観光客が訪れるようになりました。

国道 6 号の整備は、四倉海水浴場にも影響を与え、昭和 40 年代の四倉港の拡張もあいまって、徐々に南方へ移動していきました。



四倉海水浴場(昭和 44 年 7 月、いわき市撮影)

小名浜海水浴場も四倉海水浴場のように築港の影響を受けています。昭和 13(1938)年に小名浜港の 3 千トン岸壁が完成してからは、その西側に開設されていた小名浜海水浴場は、昭和 29(1954)年から、小名浜港の 1 万トン岸壁(現 1 号ふ頭の一部)建設が開始され、港湾施設の更なる拡充が求められるようになり、海水浴場の設置が困難になったことで、昭和 35(1960)年を最後に廃止されました。

一方で、いわき地域最大の集客を誇る海水浴場へ成長していったのは、昭和 35(1960)年に現在の勿来海水浴場へ改称された松川磯海水浴場でした。

それまで、侍岬から二つ島までの間に開設されていましたが、海水浴客の増加によって、海水浴区域外にも人があふれる状態が続いたことなどから、昭和 45(1970)年には、潮流の激しい二つ島周辺を除いた北側に区域を延長し、約 1km に及ぶ海水浴場となりました。



【絵はがき】小名浜海水浴場の賑い(昭和 20 年代)



勿来海水浴場を北側から見る
(昭和 41 年、いわき市役所所蔵) →

📶 高田敏子「波」—勿来海岸— 『藤』所収

窓は海にむかって開いていた
それで私は海と向かいあって坐っていた

私の視力のとどくかぎり遠くの
波頭の一つを見つめる
その波が近づいて
砂浜に砕け
しぶきの泡が消えるまでを見つめている
また 遠くの波頭を見つめ 近づいて
近づいて 砕けるまでを
もう何度くり返し見ていることだろう
「どこか静かな所に行って
ゆっくりしていらっしやいな」

娘がいった
「私がいなくても大丈夫？」
「大丈夫ですとも」

誰もいない海辺の小さな宿にきて
私はあした ひとりの元旦をむかえる
「日の出がきれいですよ」
宿の人が窓を開け放したまま下って行った

海はあまりに近すぎて
波は私のひざをぬらすほどによせてくる
私は娘の幼かったころを思いだした
私のひざ目がけて駆けよってくる小さな姿を
また私は娘をみごもったときのことを思った
私の中に育つ生命を見つめつづけて送った日々を
そしてまた私は 人を待って立った駅を思った
人波のむこうに見えたその人が 近づいて
近づいてくるのを 待つ時間を
波は近づいて近づいて 私のひざもとによせてくる
私の上に訪れたさまざまな時間 さまざまな愛
それらを思いながら 波を見ている
そして いまの私に確実に近づいてくるものの姿を
たしかめようともしている
子どもたちも成人したいま
私に近づいてくるものはなに？
私はあしたここでゆとりの元旦をむかえる

高田敏子【大正 3(1914)年—平成元(1989)年】

詩人。東京日本橋に生まれました。戦後、旧満州から引き揚げ東京に戻り、「コットン・クラブ」や「日本未来派」の同人を経て、第一詩集「雪花石膏」を出版しました。昭和 35(1960)年から「朝日新聞」月曜家庭欄に詩を連載し、「主婦の詩・お母さんの詩」として支持を集めました。

そして、昭和 42(1967)年に出版された『藤』で「室生犀星賞」を受賞しています。この『藤』に収録されている詩、「波」は、勿来海岸近くの旅館での様子が描かれています。

📶 『いわき民報』昭和 28 年 7 月 18 日 1 面
「海のたよりに記念スタンプ」

小名浜郵便局には、海水浴場等をデザインした暑中見舞用スタンプが窓口に備え付けられていました。このスタンプは、小名浜海水浴場に隣接した小名浜港三千トンふ頭に設けられた、小名浜郵便局の臨時出張所にも設置されました。

📶 『いわき民報』昭和 34 年 6 月 12 日 1 面
「いわき七浜を観光映画に」

📶 『いわき民報』昭和 35 年 6 月 21 日 2 面
「海水浴なら磐城の海へ キャラバン隊出発」

いわき地域では、いわき七浜の観光映画の制作や、福島県内をめぐるキャラバンなど、いわき地域の海や海水浴の PR が盛んに行われました。

他にも、海水浴のポスターやチラシが地域ごとに発行され、福島県観光課による「ミス福島」が出演するいわき七浜の観光映画が制作されました。

📶 昭和 50 年代～平成

和暦	西暦	月	日	事 項
昭和 53	1978	5		[薄磯] 「塩屋埼灯台と薄磯・豊間海岸」が「福島県三十景」に選ばれた。
昭和 53	1978			市内の海水浴場の入込客数が最大になる。全体で約 250 万 1 千人。
昭和 58	1983	3		[新舞子ビーチ] 福島県が人工ビーチ整備を含む、「海岸環境整備事業」計画を発表。
昭和 61	1986	7		[勿来] 増加した海水浴客や車社会の進展に対応するため、400 台余を収容できる駐車場を設置。
平成 7	1995	7		[四倉] 「オアシス 40 構想」により、ココスヤシ等を植栽。
平成 7	1995	7		[新舞子ビーチ] 海水浴場を開設。
平成 8	1996	7		[薄磯] 薄磯海岸が「日本の渚・百選」に選ばれた。
平成 8～ 15 年度	1996 ～ 2003 年度			[勿来] 福島県は、勿来地区海岸環境整備事業を推進。階段状護岸階段の建設や排水路の改善などの環境整備を行った。
平成 12	2000	5		[勿来] 県の勿来地区海岸環境整備事業の一環として、浸食の進んだ二つ島は、炭素繊維のモルタルの擬岩に置き換えられた。
平成 14	2002			[久之浜] この年を最後に、海水浴場廃止。
平成 15	2003			[波立] 久之浜海水浴場廃止に伴って、「久之浜・波立海水浴場」に改称。
平成 15	2003			[四倉] 海気館が取り壊された。
平成 22	2010			[薄磯] 晴れの日が多く、約 26 万 3,000 人の入り込み客を数え、勿来海水浴場を上回った。
平成 23	2011	3	11	東日本大震災。津波によって、沿岸部が大きな被害を受けた。
平成 24	2012			[勿来] 海水浴場が再開。
平成 25	2013			[四倉] 海水浴場が再開。
平成 29	2017			[薄磯] 海水浴場が再開。
平成 30	2018	5	17	[合磯] 「第 1 回いわき市海水浴安全対策会議」において、海水浴場の廃止決定。
令和 1	2019			[久之浜・波立] 海水浴場が再開。
令和 2	2020			新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴って、海水浴場の開設を中止。

いわき市の海水浴場の入込客数は、昭和 53(1978)年にピークを迎えました。最大は、勿来海水浴場の約 112 万 4 千人、次いで、薄磯海水浴場の約 51 万 2 千人、全体では約 250 万 1 千人に上りました。

この海水浴人気は、「海の家」をはじめ、宿泊施設や鉄道・バスといった輸送機関などに高い波及効果と呼んだことで大きな地域活性をもたらし、海水浴は、いわき市の観光にとって欠かせない存在になっていました。

こういった状況の中で、新たな海水浴場の設置も検討されました。昭和 58(1983)年 3 月、新舞子海岸の人工ビーチ整備を含む、福島県の「海岸環境整備事業」の計画が発表され、整備が進められました。それにより、平成 7(1995)年に、いわき市初の人工海水浴場「新舞子ビーチ海水浴場」が開設されました。

これまで、海水浴入込客数と夏季の晴れの日数が比例する時代が続き、特に勿来海水浴場は牽引的役割を果たしました。しかし、平成 10 年頃から、天候関係なく入込客数が減少傾向をたどりました。その原因としては、夏季のレジャーの多様化や少子化などの外的要因と、ごみの増大などの海水浴場周辺の環境悪化といった内的要因が複合的に作用したものと考えられています。

そういった中で、久之浜海水浴場は、費用対効果を考慮し維持・存続が困難になったため、平成 14(2002)年を最後に廃止となりました。それに伴って、波立海水浴場が「久之浜・波立海水浴場」に改称されています。



勿来海水浴場「海の家」を南側の侍岬から見る
(昭和 50 年、いわき市撮影)



新舞子ビーチ (平成 7 年 7 月、いわき市撮影)



薄磯海水浴場と塩屋崎灯台を北側から見る
(平成 11 年 8 月、いわき市撮影)

平成 8(1996)年、薄磯海岸が「日本の渚・百選」に選ばれました。これは、日本の渚百選中央委員会によって、全国の海や湖沼等の渚の内、良好な状態で保存されている 100 か所が、「海の日」の祝日制定を記念して選定されたものです。

『いわき民報』平成 10 年 7 月 28 日 14 面 「海水浴場清掃しゲームを楽しむ 薄磯」

平成 10(1998)年 7 月、薄磯海水浴場では、薄磯観光組合と FM いわきの共催で、「サマービーチクリーンキャンペーン」として、海岸の清掃とビーチフラッグや宝探しなどのゲームが行われました。

「サマービーチクリーンキャンペーン」は、平成 9(1997)年 7 月、「四倉まちづくり推進協議会」と、開局から 10 か月を迎えた FM いわきによって、いわき市の海を守り、浜辺の健全な利活用を推進することを目的として始められたものです。

この時は、四倉海水浴場の清掃の様子を、同地に設置された FM いわきのサテライトスタジオから発信し、市民への啓発を行いました。翌年の薄磯海水浴場でのイベントでは、ゲームを交えたものになった他、新舞子ビーチ海水浴場でも同キャンペーンが行われる予定になっている等、広がりを見せました。

平成 7(1995)年 7 月、「オアシス 40 構想」に基づいて四倉海水浴場にココスヤシやフェニックス(カナリーヤシ)といった「ヤシの木」が植樹されました。

「オアシス 40 構想」は、四倉地区のまちづくりグループの「00Y(オーイ)三集」と「四倉町の二十一世紀を考える会」によって企画されたもので、いわき市の姉妹都市であるオーストラリア・タウンズビル市のイメージを取り入れたまちづくりの土台として、「ヤシの木」の植樹や遊歩道の整備が行われました。

四倉海水浴場 (平成 7 年 7 月、いわき市撮影) →



平成 23(2011)年 3 月に発生した東日本大震災での大津波によって、いわき市の沿岸部は、大きな被害を受けました。この復旧のため防潮堤の工事が進められたことなどにより、平成 24(2012)年には勿来海水浴場、平成 25(2013)年には四倉海水浴場、平成 29(2017)年には薄磯海水浴場、令和元(2019)年には久之浜・波立海水浴場が、それぞれ再開されました。



海開き（平成 24 年 7 月、いわき市撮影）

参考文献

- ・『いわき発・歳月からの伝言 2』 おやけ こういち // 著 2021 K/210.1-1/オ-2
- ・『絵はがきの中の「いわき」』 いわき市立いわき総合図書館 // 編 2009 K/210.6-1/イ
- ・『いわき民報』 いわき民報社 // 編 出納書庫(原紙)・K/071/イ(縮刷版)
- ・『広報いわき』 いわき市 // 編 K/318.5/イ
- ・『常磐毎日新聞』 常磐毎日新聞社 // 編 図書館ホームページで公開
- ・『海水浴と日本人』 畔柳 昭雄 // 著 2010 492.5/ク
- ・『いわきの人物誌 下』 いわき地域学会 // 編 1993 K/281/イ
- ・『いわきの文学散歩』 雫石 太郎 // 著 1979 K/910.2/シズ
- ・『温泉めぐり』 田山 花袋 // 著 1991 K/915.6/タヤ
- ・『長塚節全集 第3巻』 長塚 節 // 著 1978 918.6/ナカ-3
- ・『高田敏子詩集 I』 高田 敏子 // 著 1986 SS/911.5/タ-1
- ・『写真が語る いわき市の 100 年』 吉田 隆治 // 監修 小野 浩 他 // 著 2019 K/210.6-1/シ
- ・『ふるさとの思い出写真集 平』 斎藤 伊知郎 // 編 1980 K/210.6-1/タ
- ・『ふるさとの思い出写真集
小名浜・江名・泉』 高萩 精玄 他 // 編 1981 K/210.6-1/オ
- ・『ふるさとの思い出写真集 勿来』 雫石 太郎 // 編 1980 K/210.6-1/ナ
- ・『目で見るといわきの 100 年』 小野 一雄 他 // 編 1996 K/210.1-1/メ
- ・「いわきの今むがし」 いわき市ホームページ

<http://www.city.iwaki.lg.jp/www/genre/1503014401450/index.html>

令和 4 (2022) 年 7 月 8 日 発行

■編集・発行 いわき市立いわき総合図書館



令和 4 年度 前期常設展 「いわき七浜の海水浴場」

■会期 令和 4 (2022) 6 月 28 日(火) — 10 月 16 日(日)

■会場 いわき総合図書館 5 階 地域資料展示コーナー